

二〇〇九年度 一般入学試験 A日程

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は27ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認してください。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせてください。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んでうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

国

語

(60分 100点) (解答番号

1

48)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

夜明けからかけすが鳴き騒いでいる。

雨戸をあけると、目の前の松の下枝から飛び立ったが、またもどって来たらしく、朝飯の時は羽音が聞こえたりした。

「うるさい鳥だな。」と弟が立ちかかった。

「いいよ、いいよ。」と祖母が弟を止めた。

「子供をさがしているんだよ。昨日雛ひなを巢ねから落としたらしいよ。昨日も夕方暗くなるまで飛び廻まわっていたが、わからないのかね。でも感心(1)なものさ、今朝もちゃんとさがしに来るんだもの。」

(2) 「お祖母おばあさん、よくおわかりになるわね。」と芳子は言った。

祖母は目が悪い。十年ほど前の腎臓炎じんぞうえんのほかには病氣びやうきらしいものをしたことはないが、若い時(注)からのそこひで、今はもう左眼だけがかすかに見えるか見えないくらいであった。茶碗ちやわんも箸はしも手渡してやらねばならない。(4)勝手知った家(注)の中は手さぐりで歩くけれども、庭へひとりで出ることはない。

(5) ときどきガラス戸の前に立っていたり、坐すわっていたりして、掌てのひらをひろげながら、ガラス越しの日ざしに五本の指をかざして、と見こう見している。根限りの生命をその視力に集中している。その時の祖母が芳子は恐ろしかった。うしろから呼びたいようにも思うが、そつと遠くへかくれてしまうのだった。

そんな目の悪い祖母が、かけすの鳴き声を聞いただけで、目に見たように言ったので、芳子は感心したわけだった。

芳子が朝飯の後かたづけに台所へ立つと、かけすは隣の屋根で鳴いていた。

裏庭には栗が一本と柿が二三本ある。その木を見ると細かい雨の降っているのがわかる。葉のしげりをバックにしないと見えないような雨である。

かけすは栗の木に飛び移って、それから低く地上をかすめて飛んだかと思うと、また枝にもどった。<sup>(6)</sup>しきりに鳴く。母鳥が立ちさりかねているのだから、雛鳥はこのあたりにいるのだろうか。

芳子は気にかかりながら部屋へはいった。朝のうちに身じまい<sup>(7)</sup>をしておかねばならない。

ひる過ぎに父と母とが芳子の縁づく先の母親をつれて来ることになっている。

芳子は鏡台の前に坐って、爪の白い星をちよつと見ていた。爪に星が出来るのはなにかもらうしるしだと言ったものだが、ウイタミンCかの不足だと新聞に出ていたのを思い出した。化粧は割に気持ちよく出来た。自分の眉も唇もみんな可愛くてしかたがなくなつて来た。着物も楽に着られた。

母が着つけの手伝いに来てくれるかと待つ思いもあつたが、ひとり<sup>(8)</sup>で着た方がよかつたと思つた。

父母は別居している。二度目の母である。

父が芳子の母を離婚したのは、芳子が四つ弟が二つの時だった。母は派手に出歩いて金使いも荒かつたということだが、ただそればかりでなく、離婚の原因はもつと深<sup>(9)</sup>コクなものであつたと芳子もうすうす感<sup>(10)</sup>づいていた。

弟が幼いころ母の写真を見つけ出して父に見せると、父はなんとも言わなかつたが、恐ろしい顔をして、いきなりその写真を引きさいてしまった。<sup>(11)</sup>

芳子が十三の時、家に新しい母を迎えた。後に芳子はよく十年も父がひとり<sup>(8)</sup>でいてくれたと思うようになった。二度目の母はいい人で、なごやかな暮らしが続いた。

弟が高等学校に上がつて寮で暮らすようになると、義理の母への態度が目に見えて変わつて来た。

<sup>(12)</sup>「姉さん、母さんに会つて来たよ。結婚して麻布にいるんだ。すごく綺麗<sup>(12)</sup>なんだぜ。僕の顔を見て喜んだよ。」  
弟に突然言われて芳子は声も出なかつた。顔色を失つてふるえ出しそうだった。

向こうの部屋から母が来て坐った。

「いいよ、いいよ。自分の生みの親に会うのだもの、悪いことじゃない、当たり前よ。<sup>(13)</sup>こんな時が来るだろうってことは、母さんだつて前からわかつてたんだもの。別になんとも思やしないよ。」

母は体の力が抜け落ちたようで、芳子には瘦せた母が可哀想なほど小さく見えた。

弟はぶいと立つて行つた。芳子は思い切り打つてやりたかつた。

「芳子さん、あの子になんにも言うんじゃありませんよ。言うだけあの子を悪くするんだから。」と母は小声で言つた。<sup>(14)</sup>芳子は涙が出た。

父は弟を寮から家へ呼びもどした。芳子はそれですむだろうと思つていたのに、父は母をつれて別居してしまつた。

芳子は恐ろしかった。なにか男の憤怒か怨恨かの強さに打ちひしがれたようだつた。前の母につながる自分達も父は憎んでいるかと思つた。ぶいと立つて行つた弟も男の父の恐ろしさをうけついでいるかと思つた。

しかしまた、前の妻と別れてから後の妻を迎えるまで十年間の父の悲しさと苦しさも、芳子は今になってわかるようにも思へた。

そうして別居している父が縁談を持つて来た時、芳子は意外だつた。

「お前には苦勞をかけてすまなかつた。こうこういうわけの娘ですから、お嫁というよりも、楽しい娘時代を取りもどさせてやつて下さいと先方の母親によく話してある。」

<sup>(15)</sup>父にそんなことを言われると芳子は泣いた。

芳子が結婚すれば、祖母と弟とを世ワする女手がないから、父達は祖母達と一つになるということであつた。それが先ず芳子の心を動かした。父のことから結婚を恐ろしいように思つていたが、實際の話にぶつかるとそう恐ろしいとは思わなかつた。

身支度<sup>(17)</sup>がすむと芳子は祖母のところへ行って立つた。

「お祖母さん、この着物の赤いのお見えになつて？」

「ぼうつとそこらの赤いのはわかるよ。どれ。」と祖母は芳子を引き寄せて着物や帯に目を近づけながら、

「もう芳子の顔は忘れたよ。どんなになっているのか、見たいねえ。」

芳子はくすぐったいのをじっとしていた。祖母の頭に軽く片手をおいた。

父達の来るのをその辺まで出迎えたく、芳子はぼんやり坐っていられないので庭へ出た。掌を開いてみたが濡れるほどの雨ではない。裾をからげて、小さい木のあいだや熊笹のなかを丹念にさがしていると、萩の下の草のなかに雛鳥がいた。

芳子は胸をどきどきさせて近づいたが、雛はじっと首をすくめたままだった。たやすくつかまえた。元気がなくなっているらしい。あたりを見廻したが母鳥はいない。

芳子は家へ走りこんで、

「お祖母さん、雛鳥がいたわ、つかまえたわ。弱ってるわ。」

「おや、そうかい。水を飲ませてごらん。」

祖母は落ちついていた。

茶碗に水を汲んで嘴を入れてやると、小さいのをふくらませて可愛く飲んだ。それで元氣を取りもどしたのか、

「キキキ、キキキ……。」と鳴いた。

母鳥が聞きつけたらしく飛んで来ると、電線に止まって鳴いた。雛は芳子の手のなかで身もだえしながら、

「キキキ……。」と呼んだ。

「ああ、よかったね。早くおかあさんに返しておやり。」と祖母が言った。

芳子は庭へ出た。母鳥は電線を飛び立ったが、向こうの桜の梢からじっと芳子の方を見ていた。

芳子は掌のなかの雛を見せるように片手を上げてから、そっと地上においた。

ガラス戸の蔭から様子を見てみると、空をアオいで悲しげに鳴く雛鳥の声を頼りに母鳥が次第に近づいて来た。すぐ傍の松の下枝まで母鳥がおりて来た時、雛は飛び立たんばかりに羽ばたきして、その勢いでよろよろと前に歩くと、ひっくりかえりそ

うにタオれながら、鳴き立てた。<sup>(21)</sup>

それでも母鳥は用心深くなかなか地上におり立たない。

まもなくしかし、すつと一直線に雛の傍へ来た。雛のよろこびようはない。首を振り振り、ひろげた羽をふるわせて、甘えるようである。母鳥は餌<sup>えさ</sup>をやるらしい。

芳子は父や義理の母二人が早く来てくれて、これを見せたいものと思った。

(川端康成『掌の小説』「かけす」による)

〔注〕そこひ——外見からは異常がわからない眼病の総称。

問1 傍線番号(1)・(3)・(6)・(10)・(11)・(13)を品詞別に分類したものととして、適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

1

- ① (1)感心な (13)こんな)と (3)もう (10)うすす)と (6)しきりに (11)いきなり)
- ② (1)感心な (6)しきりに)と (3)もう (10)うすす)と (11)いきなり)と (13)こんな)
- ③ (1)感心な (6)しきりに)と (3)もう (10)うすす)と (11)いきなり)と (13)こんな)
- ④ (1)感心な)と (3)もう (6)しきりに)と (10)うすす)と (11)いきなり)と (13)こんな)
- ⑤ (1)感心な (6)しきりに)と (11)いきなり)と (3)もう)と (10)うすす)と (13)こんな)

問2 傍線番号②「『お祖母さん、よくおわかりになるわね。』と芳子は言った」とあるが、この言葉には芳子のどのような心情が表れているか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

2

- ① 視覚の衰えを周囲に悟られないように、まるで目で見たかのように、かけすの状況を説明する祖母への哀れみ
- ② かけすの鳴き声から、目が不自由であるとは思えないほど、鳥たちの状況を的確に把握する祖母への感嘆の念
- ③ 視覚を失い聴覚にしか頼れないという自分の現状を受け入れようとせず、無理をし続ける祖母を心配する気持ち
- ④ 周囲の力を借りねば生活できないほど、目が悪くなってしまった祖母の悲しみやつらさを理解し励ましたいという思い
- ⑤ 視覚を失いながらも聴覚をときどきますことで、何とか外の様子を把握しようと努力を続けている祖母への畏怖いふ

問3 傍線番号④・⑤・⑦・⑱の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

3

6

(4) 勝手知った

3

- ① 危害を及ぼしそうなものは取り除いてある
- ② 自分の好きなように振る舞うことができる
- ③ 間取りや家具の配置をよくわかつている
- ④ 家族の手助けを常に必要としている
- ⑤ 周囲が病氣のことを理解してくれている

(5) と見こう見している

4

- ① あちらこちらに目を向けている
- ② ちらっと見ている
- ③ 遠目で見ている
- ④ 目を細めている
- ⑤ ぼんやりとしている

(7) 身じまい

5

- ① 結婚への決意を固めておくこと
- ② 家の中をきちんとしておくこと
- ③ 気持ちの整理をつけておくこと
- ④ 家を出る準備をすませておくこと
- ⑤ 化粧や身なりを整えておくこと

(18) 丹念に

6

- ① 時間を気にせず ゆったりと
- ② 遠くの場合まで
- ③ 同じ場所を何度も
- ④ よく注意して丁寧
- ⑤ 必死になって懸命に



問4 傍線番号(8)「ひとりりで着た方がよかったと思つた」とあるが、「芳子」がこのように思つたのはなぜか。その理由の説明

として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

7

- ① 自分の手で準備をし、自分自身と向き合う時間を持つことで、今の自分の姿に自信めいたものを感じられたから
- ② 自分を実の娘のように育ててくれた義理の母と二人きりになったら、家を出る決心が鈍つてしまうと考えたから
- ③ 美しく着飾ることで、自分達を捨てた実の母に生き写しとなった自分の姿を、義理の母には見せたくなかったから
- ④ 時間をかけて準備することで、嫁ぎ先の母親に、自分でも満足できるほど美しい姿を見せることができるから
- ⑤ 予想外に美しく仕上がつた自分の姿に満足している様子を、義理の母に見せようとは思わなかつたから

問5 傍線番号(9)・(16)・(19)・(21)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

8

11

(9) 深コク

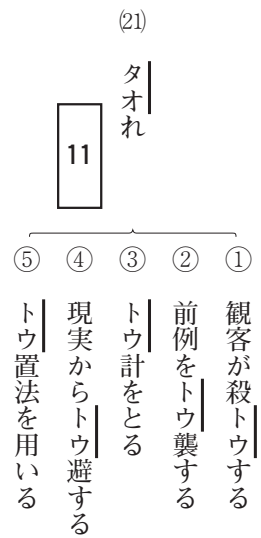
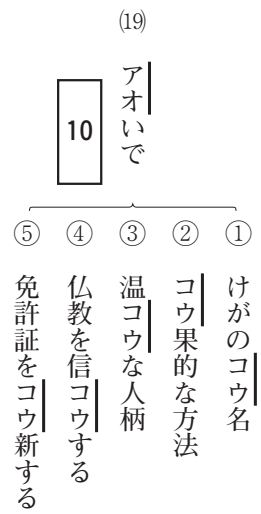
8

- ① 太陽のコク点を観測する
- ② 苦手科目をコク服する
- ③ 学校に遅コクする
- ④ ルール違反をコク発する
- ⑤ 雑コクを食べる

(16) 世ワ

9

- ① ワ術にたけた人
- ② ワ室でくつろぐ
- ③ ワが国の将来を考える
- ④ 犬に首ワをつける
- ⑤ 二ワのにわとりを飼う



問6 傍線番号(12) 「弟に突然言われて芳子は声も出なかった」とあるが、この時の「芳子」の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 義理の母との濃密なかかわりの中で忘れかけていた実の母の現状を知らされた衝撃
- ② 弟が自分に内密で実の母に会い、親しい関係になっていたことに対する強い嫉妬しつと
- ③ 義理の母の気持ちを無視した心ない弟の言動に対する激しい怒り
- ④ 自分を捨てた実の母が再婚して、幸せであることに対する割り切れない思い
- ⑤ 義理の母への配慮から、実の母について知ろうとは思わなかったことへの後悔

問7 傍線番号(14)「母は小声で言った」とあるが、ここでの「母」についての説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中

から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 母親として自分の存在を認めていない弟の態度に強い衝撃を受けたものの、どう対処していいかわからず、とりあえず、問題をこれ以上大きくしないために、芳子の行動を抑制しようとしている
- ② 弟が義理の母である自分よりも実の母を慕うことは仕方のないこととあきらめ、自分を気遣ってくれる芳子と弟の仲を悪化させることを恐れて、芳子を非難することでその場をおさめようとしている
- ③ 弟が実の母に会っていることは、以前から薄々感じていながらも当然の成り行きとして冷静に受け止め、むしろそのことで興奮状態にある弟のことを心配し、なんとか落ち着かせようとしている
- ④ 実の母と自分を比べ、あからさまに反抗してくる弟の態度を嘆かわしく思い、これ以上はもう父親の手を借りるしかないと腹をくくり、とりあえず、芳子にも静観させようとしている
- ⑤ 自分の存在を無視するような弟の言葉に深く傷つけられながらも、自分の置かれている立場をわきまえ、そのつらさを心の内に隠し、弟の気持ちを気遣いつつ、芳子の憤りをなだめようとしている

問8 傍線番号(15)「父にそんなことを言われると芳子は泣いた」とあるが、ここでの「芳子」についての説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

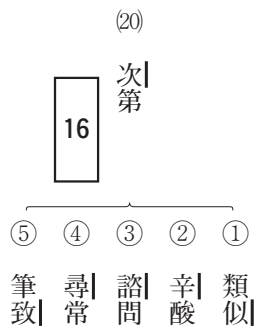
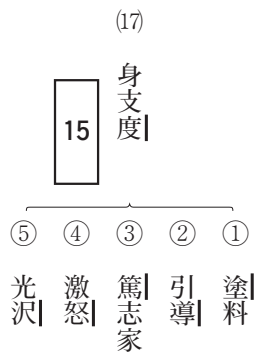
14

- ① 娘に対する憎しみがあるのに先方に頭を下げてくれた父に、長年抱いていたわだかまりが少し解けたような気がしている
- ② 実の母が去り父とも別居してきた孤独な日々のつらさを改めて思い出し、結婚に対する不安が募っている
- ③ 自分の疑念が誤解であったと気づき、深い情愛で自分に配慮してくれた父に対する感謝を感じている
- ④ 家族のつながりを取り戻すため、結婚に対する漠然とした恐れを振り捨て、父の申し出を受け入れようとしている
- ⑤ 父の言葉によって、これからは家族と離れて暮らさなければならぬことを改めて実感し、寂しさを募らせている

問9 傍線番号(17)・(20)と同じ読みものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

15

16



問10

この文章における芳子の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 祖母を慕い、父のやり方を受け入れられずにいたが、かけすの雛が母鳥を求める様子を目にしたことで実の母や弟も含めて自分を取り巻く人間関係を修復しなければならないと思うようになった
- ② 義理の母に深い愛情を感じ、実の母を決して許せないと思いつづけてきたが、互いをさがし続ける母鳥と雛の様子に心を打たれ、弟と同じように自分の中にも実の母に対する深い思慕の情があったことに気づいた
- ③ 草の中で弱っていた雛鳥の姿に両親の愛情を受けずに育ってきた自分を重ね合わせ、結婚に対する恐れを感じ始めただけでなく、自分が家を離れた後の祖母の境遇にも不安を募らせている
- ④ 家庭的に恵まれず、父や弟に対して複雑な思いを抱いていたが、次第に父の境遇や思いに理解を示すようになり、母鳥に甘えるかけすの雛の姿を見つめながら愛する人々とのきずなを感じている
- ⑤ 実の母にも父にも見捨てられ、父に対する不信感を募らせていたが、祖母や義理の母に諭され、雛の姿を必死にさがす母鳥の姿を目にしたことで、父の親心がやっと理解できるようになった

問11

本文の作者の説明として、適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 『山椒魚』によって、動物の有り様を独自の視点とユーモアを交えて描いた
- ② 『伊豆の踊子』『刺青』などによって官能的な女性美を追求した
- ③ 大学在学中に発表した『鼻』によって、菊池寛に才能を認められた
- ④ 『雪国』『古都』などの代表作があり、新感覚派の作家として活躍した
- ⑤ 『文芸時代』を創刊し、『日輪』『機械』などによって複雑な心理を描いた

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

人間の意識や思考というものが、物質世界に対してどのような関係にあるのか明らかではなかった時代には、人間の思考を物質世界の厳密なる因果的進行と切り離して「ブラックボックス」に入れることができた。そのブラックボックスの中では、すべてのことが可能であった。死者と交信することも、異カイ<sup>(1)</sup>のヴィジョンを見ることも、この世界に存在しないものを仮想することもできた。

そのような、「何でもあり」<sup>(2)</sup>のブラックボックスにおいては、人間の思考が「曖昧」<sup>(あゝまい)</sup>でありうるのは当然であった。世界が因果的な視点からどれほど「厳密」にできていたとしても、思考はそれと切り離されたブラックボックスの中にあるのだから、それは曖昧になることもできたのである。

3、一方では思考の数理的基礎の解明が進み、また一方では脳科学や認知科学が発展してきたことによって、世界中の物質の数学的に厳密な因果的進行から遊離したブラックボックスの中に人間の思考を隔離しておくことが、次第に困難になっていった。

今日のコンピュータの理論的基礎をつくったイギリスの数学者アラン・チューリングの「チューリング・マシン」のモデルや、アメリカの数学者ノーバート・ウィナーの「サイバネティクス」などの成果を通して、ブラックボックスに入っていたはずの人間の思考は、次第に<sup>(4)</sup>ハク日<sup>(さか)</sup>の下に曝<sup>(さら)</sup>されていった。思考の本性は、脳や身体もまたその一部である物質世界を支配する厳密な因果的法則との連続性の中に把握されるに至ったのである。

脳に電極を<sup>(5)</sup>サすことによる単一の神経細胞の活動の計測や、fMRI<sup>(6)</sup>(機能的磁気共鳴画像法)などの非侵襲的方法による脳機能の解明が進むことにより、<sup>(6)</sup>抽象的<sup>(けいじじよがく)</sup>で形而上学的<sup>(けいじじよがく)</sup>に見える人間の思考も、外界との相互作用の中に立ち現れる一般的な認知プロセスと共通の脳活動によって支えられていることが明らかにされていった。身体制御やリズム知覚、空間情報処理、感覚統合といった「地上的な」能力によって、物質的な世界に容易に着地しないかに見える「天上的」思考もまた支えられているの

である。

いうまでもなく、一般の認知プロセスと連続する形で抽象的な思考をも支える脳内のすべての物質的過程は、<sup>(7)</sup>きわめて精緻な自然法則に支配されており、そしてこれらの自然法則の究極的表現が、厳密な数学的形式である。

<sup>(8)</sup>「思考の自然化」とでも呼ぶべき事態の進行の下で、人間の思考はブラックボックスから出された。このような人間の思考の基礎に関する考え方の変化を前にして、思考の曖昧さは<sup>(9)</sup>ジミ明のことではなく、むしろ一つの驚異であることをこそ見て取るべきである。<sup>(10)</sup>脳内過程の厳密なる進行に支えられているにもかかわらず、人間の思考がいかにして「曖昧」たりうるのかということ自体が、<sup>(10)</sup>大変な問題を提起しているのである。

そもそも、人間の思考作用において、「曖昧」ということは本当に可能なのか？ もし可能だとしたら、その思考における「曖昧さ」は、それを支える脳の厳密なる因果的進行と、どのように関係するののか？

世界を因果的に見れば、そこには曖昧なもの<sup>(11)</sup>も一つもない。その曖昧さのない自然のプロセスを通して生み出された私たちの思考もまた、この世界にある精緻さの<sup>(11)</sup>顕れでなければならぬはずである。

それにもかかわらず、私たちは、確かに、曖昧な自然言語の用法があるように感じる。もし、自然言語が、厳密な因果的進行が支配する世界の中に「曖昧」な要素を持ち込むということを可能にしているのだとすれば、それ自体が一つの奇跡だということかない。

この奇跡をもたらししている事情を突き詰めていけば、物質である脳にいかにか私たちの心が宿るかという心脳問題に論理的に行き着くことはいうまでもない。

そして、この、私たちの心の存在がもたらす奇跡は、単なる「厳密さの喪失」という問題では片づけられない、<sup>(11)</sup>仮想空間の豊饒をもたらししているのである。

言葉の持っている不思議な性質の一つは、それが数学的形式の基準からいえば曖昧であるからこそ、そこにある種の無視できない力が宿る、という点にある。だからこそ、言葉は、人間の思考において、社会的言説において、そして文学のような芸術表

現において力を持ち続けているのである。

そもそも、自然言語という思考の道具の豊饒さの起源は、数学的形式と対峙したときに「曖昧」と片づけられがちな、その表現世界の内包する自由の中にあるようにさえ思われる。数学的形式と同じような形で「厳密さ」を追求すれば、自然言語の内包している可能性は、むしろ殺されてしまうのである。

たとえば、マックス・ウェーバー研究等で知られる経済史学者、大塚久雄の『社会科学における人間』の中の次の部分について考えてみよう。

群衆の一人一人はそんな動きをすることがいやでしようがない。そんな気はぜんぜんない。しかも、自分たちの力のソウ和が自分たち自身に対してまったくよそよそしい、疎遠なものになってしまっていて、逆に自分たちをあらゆる方向に押し動かしていく。これがいわゆる「疎外」現象なんです。とにかくそのなかでは、人間はもはや人間らしく主体であることをやめて、物とまったく同じに 15 になってしまっているわけです。

マルクスの「自然発生的分業」によって生じてくる「疎外」現象を説明するたとえとして持ち出されるこの比喻は、確かに、私たち人間の社会における切実で時に恐ろしい問題を指し示しているように感じられる。

引用文に先立って大塚久雄が具体的な事例としてあげているのが、自身が子供のときに野球の試合を見物に行き、群衆の混乱の中に巻き込まれてひどい目にあつた経験である。ここで、経済史学者としての大塚久雄の問題意識が、社会的存在としての人間のどのような属性に向けられているのか。社会という怪物の中に潜む、時に恐ろしいものの気配に敏感な者にとっては、いうまでもなく明らかなことだろう。

自然科学の記述として上の「疎外」論を読めば、いうまでもなくそれはあまりにも曖昧である。群衆というのはどれほどの規模の集団を指すのか、一人一人の身体の質量はいかほどで、どのような初期状態に分布しているのか？ 人と人の間に働く力は



距離の関数としてどう与えられるのか？「よそよそしい、疎遠なもの」とは、一体、力学的にいうとどんな現象を指すのか？これらの要素を具体的に記述し、必要に応じて実験やコンピュータ・シミュレーションをしなければ、群衆ダイナミクスの中の「疎外」の自然科学的記述は完結しないだろう。

その一方で、そのような厳密な条件詰めをすることによって、大塚久雄の社会科学的思想の本質とはずれた方向に導かれていってしまうことも、また事実であるように思われる。

17、大塚の文章においては、その記述が具体的にどのような現象を指しているのか、厳密には規定されていない。しかし、だからこそ、そこには大塚の切実な問題意識が確かに立ち現れているのが感じられる。それは、戦争に突き進んでいく時代の個人の無力さを指しているのかもしれない。会社の中の人間関係のことかもしれない。マーケットに翻弄ほんろうされる生産者の切なさかさに関わることもかもしれない。人間が他者との関係性の中で生きるときに立ち現れる切なくも凄まじいすまじさまざまな事態に対する大塚の鋭い感受性が伝わってくるからこそ、右に引用した文は力を持つ。

自然言語による思考は、曖昧だからこそ力を持つ、などとまで主張するつもりはない。18、曖昧さは確かに存在し、言葉に時に疑いような力を与えることを確認するだけである。その上であえていえば、自然言語における思考とは、曖昧さの芸術なのである。

（茂木健一郎『曖昧さ』の芸術）による

問1 傍線番号(1)・(4)・(5)・(9)・(12)・(14)・(16)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

19

25

(1) 異カイ

19

⑤ ④ ③ ② ①

友人を紹カイする  
内閣をカイ造する  
境カイ線をひく  
カイ文書が出回る  
カイ議を欠席する

(5) サ

21

⑤ ④ ③ ② ①

一シを報いる  
パソコンを駆シする  
日時をシ定する  
先行投シする  
シ激を与える

(12) 対チ

23

⑤ ④ ③ ② ①

企業を誘チする  
自転車を放チする  
チ安を維持する  
価チ観が違う  
周チの事実だ

(4) ハク日

20

⑤ ④ ③ ② ①

犯行を自ハクする  
ハク車をかける  
ハク力ある文章  
二ハク三日の旅  
軽ハクな行動

(9) ジ明

22

⑤ ④ ③ ② ①

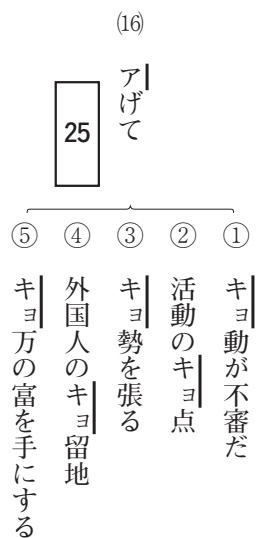
当ジ者に話を聞く  
俗ジに入りやすい  
ジ叙伝を書く  
臨ジニュースを聞く  
逐ジ刊行する

(14) ソウ和

24

⑤ ④ ③ ② ①

同ソウ会に行く  
ソウ飾を施す  
高ソウビルが建つ  
生徒ソウ会を開く  
敵にソウ遇する



問2 傍線番号(2)「『何でもあり』のブラックボックス」とあるが、それはどのような状態を表現しようとしたものか。その説

明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

26

- ① 無限の可能性を秘めた自由な世界ではあるが、それだけに底知れぬ恐ろしさも感じさせる状態
- ② 明確な形で実態を説明できていないため、とらえどころがなく、どのようにでも考えられる状態
- ③ だれもその実態をうかがい知ることができないため、神秘的で奥深い魅力をたたえている状態
- ④ 周囲から切り離された完結した世界の中で、すべてが曖昧なまま渾然<sup>こんぜん</sup>一体となっている状態
- ⑤ 超自然の世界とつながっており、現実の世界と対立する、妖怪<sup>ようかい</sup>がはびこっているような状態

問3 空欄番号

3

・ 17

・ 18

に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つ

ずつ選びマークしなさい。ただし、重複は避けること。

27

29

① 確かに

② すなわち

③ ただ

④ なぜなら

⑤ ところが

3

17

18

27

28

29

問4

傍線番号(6)

「抽象的」とあるが、これの反対語として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

30

① 象徴的

② 一般的

③ 大衆的

④ 具体的

⑤ 画一的

問5

傍線番号(7)

(11)の品詞として、適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

31

・ 32

(7) きわめて

31

① 名詞

② 動詞

③ 連体詞

④ 副詞

⑤ 助動詞

(11) その

32

① 助詞

② 助動詞

③ 代名詞

④ 接続詞

⑤ 連体詞

問6 傍線番号(8)「『思考の自然化』とでも呼ぶべき事態の進行」とあるが、その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤

の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 人間の思考が、周囲の自然界と調和するものであることがわかってきたということ
- ② 人間の思考が、複雑なプロセスを経ないで自然におこなわれるものであるとわかってきたということ
- ③ 人間の思考が、物質的プロセスを経ないで自然言語によっておこなわれるものであるとわかってきたということ
- ④ 人間の思考が、脳内での厳密で精緻な自然法則に支えられていることがわかってきたということ
- ⑤ 人間の思考が、複雑なプロセスを排除して安易におこなわれるようになってきたということ

問7 傍線番号(10)「大変な問題」とあるが、それはどのような問題か。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中か

ら一つ選びマークしなさい。

34

- ① 人間の思考についてのこれまでの科学的な研究が誤りだったのではないかという問題
- ② 人間の思考が自然科学的には永久に解明できないのではないかという問題
- ③ 人間の思考の曖昧さと脳の厳密な因果的進行とがどう関係しているのかという問題
- ④ 人間の思考がたんなる物質的プロセスの産物に過ぎないのではないかという問題
- ⑤ 人間の思考は実は厳密さを喪失してしまっているのではないかという問題

問8 傍線番号(13)「次の部分について考えてみよう」とあるが、筆者はこの後の引用部分についてどのように評価しているか。

その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① 厳密な条件詰めをすることにより、社会的存在としての人間の問題点を鋭くえぐりだしている
- ② 群衆の中にある疎外のダイナミズムが、厳密な自然科学的記述によって描かれている
- ③ 自然科学的記述としては曖昧だが、社会的現象に対する鋭い問題意識や感受性が伝わってくる
- ④ 曖昧で厳密さを欠いた記述が、結果として大塚の問題意識を超えて多くの人に訴える力を持っている
- ⑤ 学問的に未成熟な内容だが、力学や関数などを援用すれば、自然科学として成り立つ記述である

問9 空欄番号

15

に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

36

- ① 静物
- ② 物体
- ③ 客人
- ④ 客体
- ⑤ 動物

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

37

- ① 自然言語に数学的厳密さを適用することによって、より豊かでの確な表現が可能になる
- ② 自然言語も数学的な過程に還元されるので、曖昧な表現というのは本来ありえない
- ③ 曖昧な思考が物質である脳にどうやって宿るのかという仕組みが、数理的に解明されつつある
- ④ 自然言語は曖昧であればあるほど、逆に豊かで精緻な思考をすることが可能になる
- ⑤ 自然言語の持つ曖昧さや自由さが、社会的言説や芸術表現などを豊かにしている

第三問 次の文章は『文正草子』の一節で、大宮司の雑色である文正の二人の娘が才色兼備のすばらしい女性に成長し、東国の大名たちに求婚されるが、娘たちは都に上ることを望んで求婚に応じない場面に続く箇所である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

(1) 大宮司殿聞き給ひて、文正を召し、「まことや、おのれは、光るほどの姫を持ちたるが、大名、高家の、雨のあしたより繁く、文を通はすよし聞き候ふ。それをほかへ出すべからず、(2) さだみつが子どもの中にて、いづれにても婿にすべき」とのたまひければ、(3) 文正、あらめでたや、まことに女子は持つべきものなり、いかにけたかしと思ふとも、(4) 男子ならば、あがるとも、(5) 恪勤などにこそならめ、大宮司殿のあひやけに言はれんずることの嬉しきよと思ひて、「かしこまつて承りぬ。さりながら、子どもに申して、御返事申しあぐべき」とて帰りぬ。宿へ行きて、門より言ひけるは、(6) 「あなめでたや、大宮司殿の公達を婿に取り参らすべきなり。われをわれと思はん者は、みなみな御供せよ」と申しけり。

姫の方へ参りて、「めでたきことこそ候へ。大宮司殿の嫁御前に取り参らせて、据ゑ奉らんと仰せを蒙りて候ふ」とて、よに心よげにうち笑みて申しければ、姫御前たち、聞きもあへず、(7) さめざめと泣き給ふ。文正、あやしく思ひて、「いかにいかにと申しければ、「いかでかやうのことをばおぼしめし立ち候ふらん。(8) ゆめゆめかなふまじきことにて候ふ。われらが心には、大宮司殿公達とても、何とも思ひ参らせず。そのうへ、姫君たち、御嫁御様の末座に置かれ候ふこと候ひて、御盃の流れを給はらんことこそ悲しけれ。(10) せめて、主にてましますば、使はれ参らせ候はんには、参るとも、このことにおきては、ゆめゆめ思ひ寄らず」とかきくどきのたまへば、文正、よに本意なげに思ひて、「げにげに、(11) つねをかがあしく心得て候ふ」、(12) 言葉少なくてぞ立ちにけり。(13)

〔『文正草子』による〕

〔注1〕 さだみつ——大宮司の名前。

〔注2〕 恪勤——宿直などを勤めた武士。

〔注3〕 あひやけ——嫁婿の互いの親同士が、相手と呼ぶ言葉。

〔注4〕 つねをか——文正の名前。

問1 傍線番号(1)・(8)の解釈として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

38

39

(1) 文を通はすよし聞き候ふ

38

- ① 手紙を送ってくるという事情を聞いています
- ② 手紙をやりとりする理由を聞きたいものです
- ③ 手紙を渡すことのできる使者をお聞きになるのです
- ④ 文通の方法を聞かせてもらいたいものです
- ⑤ 手紙を届けさせてもよいかと聞いてくるのです

(8) ゆめゆめかなふまじきことにて候ふ

39

- ① かなうはずもない夢のようなことでございます
- ② まさかうまくいくとは思ってもみませんでした
- ③ 少しも思いどおりにならないことでございました
- ④ 断じてあつてはならないことでございます
- ⑤ ぜひ実現させずにはいられないことでございます



問2 傍線番号(2)・(4)・(7)・(9)・(11)「ず」の中から、他と異なるものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

40

- ①
- (2)
- ②
- (4)
- ③
- (7)
- ④
- (9)
- ⑤
- (11)

問3 傍線番号(3)「文正」とあるが、文正が考えたことの終わりの部分はどこまでか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から

一つ選びマークしなさい。

41

- ① くらめたや
- ② 持つべきものなり
- ③ いかにかたかし
- ④ こそならめ
- ⑤ 嬉しさよ

問4 傍線番号(5)・(10)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

42

43

(5) 承りぬ

42

- ① ラ行四段活用動詞の未然形+打消の助動詞の連体形
- ② ラ行四段活用動詞の連用形+完了の助動詞の終止形
- ③ ラ行上二段活用動詞の未然形+打消の助動詞の連体形
- ④ ラ行上二段活用動詞の連用形+完了の助動詞の終止形
- ⑤ 八行四段活用動詞の未然形+完了の助動詞の連用形+完了の助動詞の終止形

問5

傍線番号(6)・(12)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマーク

しなさい。

44

45

(10) 悲しけれ

43

- ⑤ ク活用形容詞の語幹十サ行変格活用動詞の連用形十過去の助動詞の已然形
- ④ ク活用形容詞の已然形
- ③ シク活用形容詞の已然形
- ② シク活用形容詞の連用形十過去の助動詞の未然形
- ① シク活用形容詞の終止形十過去の助動詞の已然形

(6) あなめでたや

44

- ⑤ あんなにお人好しだなんて
- ④ あんなに美しいなんて
- ③ ああ愚かなことだ
- ② ああ喜ばしいことだ
- ① ああ立派な姿だ

(12) 本意なげに

45

- ⑤ 残念そうに
- ④ 本心ではなさそうに
- ③ 期待どおりに
- ② 目的を失ったように
- ① 不審そうに

問6 傍線番号(13)「言葉少なくてぞ立ちにけり」とあるが、文正がこのような行動をとった理由として、最も適切なものを、次

の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

- ① 大宮司の申し出が突然であったため、姫たちの言い分ももつとまと納得したから
- ② 大宮司の申し出を自分は承知したのに、思いがけなく姫たちの強い拒否にあつて困惑したから
- ③ 大宮司からの申し出は願ってもない良縁なのに、姫たちの勝手な言い分に立腹したから
- ④ 大宮司家の縁談とほかの大名・高家からの縁談とを比べて、どちらを選ぶか迷ったから
- ⑤ 大宮司からの申し出を機に姫たちの結婚に対する考えを知って、その思慮深さに感心したから

問7 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

47

- ① 大宮司は、文正の姫たちが求婚されていると聞き、自分の息子と結婚させようと言った
- ② 文正は、主人である大宮司からの申し出なので断るわけにもいかず、しぶしぶ承知した
- ③ 文正は、家に帰り着くやいなや門口で大宮司の申し出を伝え、姫たちの供をする者を募った
- ④ 文正が大宮司からの申し出を姫たちに伝えると、姫たちは聞き終わらないうちに泣き出した
- ⑤ 姫たちは、大宮司のところにお仕えするならまだしも結婚はしたくないと、しきりに訴えた

問8 『文正草子』は室町時代に成立した物語であるが、文学史上の分類として、適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

48

- ① 仮名草子
- ② 無名草子
- ③ 浮世草子
- ④ 読本
- ⑤ 御伽草子